

解 答

一

- ① 厳 ② 過言 ③ 格好 ④ 絶品 ⑤ 往生

二

- ① すぐわ ② おしま ③ うかがわ ④ しのば ⑤ あやぶま

三

- | | | | |
|------|------|------|------|
| 問一 ウ | 問二 エ | 問三 オ | 問四 エ |
| 問五 ア | 問六 ウ | 問七 ア | 問八 オ |
| 問九 オ | 問十 イ | | |

四

- | | | | | |
|--------|------|------|------|------|
| 問一 イ | 問二 ウ | 問三 オ | 問四 オ | 問五 エ |
| 問六 a イ | b オ | c ウ | | |

問七 「食うー食われる」という関係の連鎖によって、ある生物が、直接的にはつながりのない別の生物に影響をおよぼすこと。

解 説

三 出典は、豊島ミホ『夜の朝顔』。

問一 「人さし指を口元にあてて」とは、ほかの大人は内緒よ、という意味。いずれ気づかれるにしても、当座は内緒にしておきたいので、用意しておいた靴下をはいて足の爪を隠したのである。ただし「私の横に、ふと白い裸足の足が置かれた。足の爪が……ピンクに塗られている」「上からふふっと軽い笑い声が降ってきた」ということや「微笑む」という動作から、子どもの「私」に対しては隠すのではなく大人っぽくしている秘密を見せて楽しんでいるふうがうかがわれる所以、本当は「私」に見られたくなかったという意味にとれるのは不適切。

問二 「マリさんの長いスカートの裾をにぎりしめた」チエミは、「おびえたように眉をぐっと寄せていた」とあるところからチエミの気持ちを考える。「おびえたように……」からは、以前とちがってしまったマリさんの様子に不安を感じていること、「スカートの裾を……」からは、それでもその不安を振り払って以前のようにマリさんに甘えたいという気持ちが感じられる。マリさんの足の爪の秘密は「私」はすでに知っていることなのでアは不適切。また、オの口止めはチエミにしたのではなく「私」にしたこと。ウのように「ひどいことをされるのではないか」と思ったら、スカートの裾をにぎりしめていたりしないで逃げてしまうはず。

問三 傍線部の後の二文に着目して「私」の気持ちを考える。同級生だったら「手を振って合図して」「『誰その人?』と言わせなければならない」「自慢しなければならない」とは、洸兄のことを同級生に気づかせ、関心を持たせ、見せびらかして自慢したいということ。

問四 「海が見えると洸兄は……『走んね?』と囁いた」ということからは、一刻も早く海で泳ぎたいという気持ちが、「遠慮がちに」や「せいいっぱい、よたよた走る私に合わせて」とあることからは、幼くて速く走れない「私」のことを気づかってゆっくり走ってやろうとする気持ちが読み取れる。

問五 「やわらかな揺れ」や「夢につつまれて」という言葉から感じ取れるのは、幸せな気分であり、ウやエのようなひどい疲れではなく、心地よい疲れである。また、オのような「洸兄と同じ夢を見ている」ということではない。「波の残像のような」とは、まだ波に揺られて海で遊んだときの楽しい気分にひたっているような、ということであり、ピアノの音が波の音のように聞こえる(イ)ということではない。

問六 食卓を囲んで、大人の男の人は男同士、大人の女三人は女同士、子どもたちは子どもたち同士で、それぞれ楽しい会話で盛り上がっている様子である。アは「暑い夏の夕方を、ますます過ごしにくいものとしている」が、イは「勝手なことを声高にしゃべる」が、エは「子どもたちだけで盛り上がっている」が、オは「食事するのももどかしくなっている」が、それぞれ誤りである。

問七 アかオか迷うところであるが、「チエミが……ぽかんとした。私も……まばたきしかできなかった」という二人の表情から感じられるのは、マリさんの言葉とそれを言うときの表情に「衝撃を受けている」様子である。イは「うらめしく思っている」が、ウは「田舎に住む『私』たちを見下した気持ち」が、エは「提案は真剣なものだった」がそれぞれ不適切である。

問八 「さっきの発言」とは、「ね、洸兄、イチノセキの一家とウチと、一緒になればいいと思わない?」という「私」の言葉。それに洸兄は、「ん。ほえいい」と調子を合わせてくれたのに、マリさんは「そんなことあるわけないじゃない」と「真っ向から否定」し、それをきっかけに普段からあつたらしい洸兄とマリさんの確執が表面化して気まずい雰囲気になり、それを察知したチエミが「目も鼻の穴もいっぱいに開いて、肩を小さく震わせて(泣き出すのを

こらえている様子)」しまったので、「私」は自分の「発言を後悔した」のである。

問九 「マリさんはきっと二度とここに来ない」「洸兄も、この先何度もここに来て遊んでくれはしない」と思いながらも、チエミの言葉に「来年になってみなくちゃわかんないよ」と答えていることから、「私」の気持ちを想像すること。アの「姉妹二人で仲よく生きていくのだという決意」、イの「洸兄だけはいつまでも変らずにいてくれる」、エの「いつものようにとりあえず調子を合わせてくれているだけ」は、それぞれ不適切。

問十 消去法で選ぶことができる。アは「何一つ思い出も残らない無惨な形で終わってしまった」が、ウは「かけがえのない夏も、無意味なものに過ぎなかった」が誤り。また、洸兄が「心の潤いをなくし、優しさを失ってしまったわけではないので、エもまちがい。オはチエミとマリさんのことしか触れていないので不適切。

四 出典は、江崎保男『生態系ってなに?』。

問一 「植物を植食者が食い、植食者を肉食者が食う」ということから導き出されるのは、肉食者が植物を食う植食者を食べば植食者は減り、植物は植食者に食われなくなる、つまり肉食者は間接的に助けている、ということ。後の北海道の河川での実験で科学的に証明されたのも、「オショロコマ(=肉食者)は藻類(=植物)の味方(=間接的に助けている)」ということである。

問二 川の上空をビニールシートで覆っても川の中のオショロコマや底生動物は移動できるので、アはまちがい。ビニールシートで覆うことでオショロコマが食うようになるのは底生動物であって藻類まで食べるようにはならないので、イも誤り。またビニールシートは、エのように陸生昆虫を集めたり、オのように「ストレスを与え」たりするためのものではない。森からオショロコマのご馳走の陸生昆虫が降ってくるのを遮断し、オショロコマが底生動物を食わざるをえないようにし、底生動物が食われて減ると川の中の藻類(植物)の量がどうなるかを調べるためにものである。

問三 「問題の植物の影響ですが」とあることに注意。「問題の」は、「この実験で調べようとしている」ということ、くらいの意味で、ここからこの実験で調べた「底生動物が食われて減ると川の中の藻類(植物)の量がどうなるか」ということの結果、つまり「より重要なことがら」について述べている。

問四 「ゴジュウカラはイモムシとともに、アリを食います」「イモムシを食うアリをさらに食ってしまうゴジュウカラ」とあるのに注意すること。ゴジュウカラは、植物を食べるイモムシを食うアリも食べてしまうので、イモムシがあまり減らないのである。

問五 「普段はアブラムシを護っているが、タンパク質が不足してくるとアブラムシの一部を食料にしてしまう」ことを指して「牧畜」といっている。

問六 「四者」が何を指すかおさえて考えること。「仮にアリスイという……」以下の部分では、「四者」は、樹木、アリスイ、アリ、イモムシを指す。樹木にとって「敵(=イモムシ)の敵(=アリ)の敵(=アリスイ)」は、結果として樹木の敵のイモムシが増えるのを助けてるので、樹木の「敵」だというのである。

問七 「風が吹けば桶屋がもうかる」式の現象を、生態系および生物群集にあてはめるとどのようなことになるかということを考えてまとめる。ある生物が直接には関係のない他の生物に影響を与えることだが、そのようになるのは「食う—食われる」という関係の複雑なからみあい(食物連鎖)によってである。